

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から⑨

平安時代前期に活躍した 保管され、真言宗の中で永四国出身の真言僧・空海は くに大切に扱われてきた。た晩年、高野山(和歌山県) だし、近年の研究により、で過(じ)っ、835(承和2) 空海自身の作ではなく没後年3月21日に亡くなった。 約100年たった10世紀の

本資料はその1週間前に自 成立であり、空海の真意をら著した遺言とされ、弟子 弟子たちがまとめたというたちが守るべき25カ条が つ のが通説となっている。

づられている。また、青年 9世紀半ばに朝廷が編さ期に室戸岬など四国で修行 んした『続日本後紀(しよを積んだ様子や、中国(唐) くにほん(こうき)』には空に渡って真言密教を日本に 海が835年に生涯を終えもたらした事績なども記さ たことが明記されている

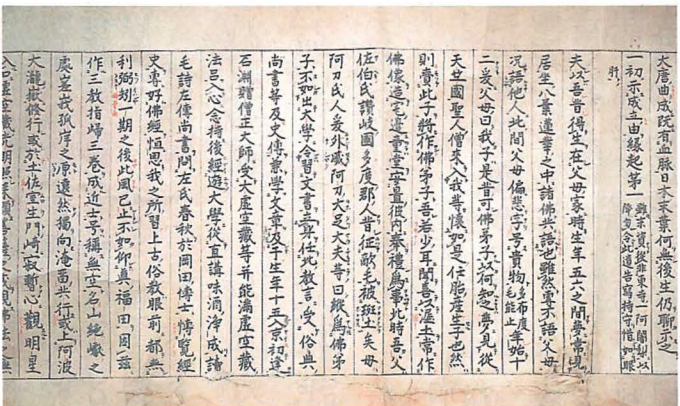
れている。 が、後世、空海は亡くなっ空海の真筆・原本とされ たのではなく、永遠の禅定るものは高野山金剛峯寺に に入ったと解釈され、現在

でも高野山奥之院や東寺において毎日、生身供(しよつじんく)が供えられ、また四国遍路では同行二人(ふじぎょつににん)といつ遍路とともに四国を巡っているといわれる。

ところが本資料には、空海は死後、弥勒菩薩(みろくぼだつ)の浄土である兜率天(たもつてん)に上り、56億7千万年後に現世に降りることが述べられている。そして、その間は雲のすきまから人々の様子を観察し、仏道に励む者は救済されると記されるなど、生身供や同行二人といった弘法大師に対する信仰とは異なった内容となっている。

空海に対して「弘法大師」の号が朝廷から与えられた

教訓25カ条や事績記す



弘法大師空海の遺言とされる「遺告二十五箇条」。平安時代中期成立、1763(宝暦13)年写(県歴史文化博物館蔵)

のは没後86年がたった921(延喜21)年のことであった。以降、人々に信仰される弘法大師の姿が形成、定着することとなる。「遺告二十五箇条」はまさにその時期に成立したもので、人間・空海が信仰の対象になっていく過程を知る上で興味深い資料といえる。

県歴史文化博物館では新常設展「密●空と海―内海清美(うちつみきよはる)展」(31日まで)臨時休館にて空海の生涯を紹介している。(専門学芸員・大本敬久)

〈随時掲載します〉

弘法大師空海の遺言